

今月の谷口雅春先生のお言葉

善き言葉と深切丁寧な動作が 運命をよくします

花びらの降るような賞め言葉

人の悪口を言う暇があれば、良き言葉を発すると、自分自身がその良き言葉の力によって育てられるのであります。善き言葉は空から花びらが降るような、音楽が聞えてくるような美しい感じがありますが、悪しき言葉は雷のように吾々の心を暗黒にするのであります。(中略)

それで皆さんは今日から、空から花びらが降るように、いつも善き言葉を雨降らせようではありませんか。皆さんの口から常に花びらのような良い言葉が出るように

なったら、どんな狭い裏長屋にありましても、そこがこの世の極楽となり天国となるのであります。たいてい会社や、工場商店などの勤め先で面白くないと言う人は、やはり家庭がどうも面白くない。家庭が面白くないのでそれで勤め先へ行ってもやはり能率がはつきり上らないで、そのために勤め先で又ぶつぶつやっている。その結果、昇給もしないという事になります。事業の発達しないのも、元はと言うと、皆家庭が悪いのであります。家庭の中で讃め合わず、暗い心持で、責め合っている時には、事業は失敗し、工場や鉱山では故障が起り、子供の健康も成績も悪くなります。

(中略)褒める言葉ぐらい結構な事はないのであります。ところがなかなか家族同士が褒め合えないものであります。というのは、それは現象に執られて、目の姿に執られて、人間の實相を見失ってしまい、人間が神の子である、ここが現実の浄土であるということを忘れてしまつて、ちよつと何か外に現れた失敗があると、それに執られてしまつて、一分間あつた失敗を一時間ぐらい嘸鳴りつける。その上、そのことをいつまでも心に持続けるといふような事をしていふような人たちの集つてゐる家庭は、いつも面白くないのであります。

(光明思想社版『人生読本』178〜180頁)

動作を丁寧ていねいに、表情を深切しんせつに

運命をよくするには常に善き言葉を使い、身体からだの動作を深切丁寧しんせつていねいにしなければなりません。丁寧にお辞儀じぎをしたら損そんをするとか、自分が相手より下のものだと思われはて恥はかしいとか考えるのは間違まちがいです。世の中の人は、表

情や身体からだを深切丁寧にする人をかえつて、「あの人は偉い人だ」と賞めるのです。これに反して「あいつは馬鹿だ、ろくろく言葉の使い方も知らない、お辞儀をする術すべも知らない」と言つて人から輕蔑けいべつせられるのは、言葉使いのぞんざいな人や、身体からだの動作に深切があらわれていない人です。こんな人の運命はよくなりません。

(光明思想社版『人生読本』262頁)

一寸ちよつとしたことことで人間の運かわが變る

世の中には学問も良くでき、立派な才能を有もちながら、運が悪くて、勤め先をあちらへ更かわり、こちらへ更かわり、しまいには落ちぶれて働く先もなくなるような人があります。そんな人はたいてい、気が短くて、言葉使いに深切せつがなく、身体からだの動作に礼儀正しきのない人です。

礼儀作法は女だけの習うものではありません。礼儀作法は男にも必要です。人間の値打ねうちを智慧ちえや学問ばかりにあると思ふのは間違まちがいです。尚なほそれよりも態度の優美とい

うことは、何よりも必要な人間の値打です。最初はこういう態度が美しいかは、鏡を見て稽古をなさるのもよろしい。どの程度に微笑する事が相手に気持ちのよい感じを与えるか、十分研究して置いて相手に快い気持ちを与える稽古をなさい。「そんな詰らないことを研究するよりも、本を読む方が偉くなる」とお考えになるかも知れませんが、しかしあなたがいくら偉くなっても、姿態はあなた自身の玄関のショーウィンドーです。ショーウィンドーが埃だらけでは、いくら家の中に上等の品物があっても、中まで入って買ってくれないでしょう。あなたの中味の値打がどれほど偉くても、言葉態度が下手では、その中味の値打を出す時が来ないのです。中味はどんなに美味しい御馳走でも、泥まみれにしたら誰でも食べ手がありません。せっかく立派な才能を有しながらも、言葉態度に深切丁寧さがなくては、せっかくのよい御馳走を泥まみれにして出すのも同じことです。

(光明思想社版『人生読本』265～266頁)

「形」と共に「心」を深切にせよ

と言つて、言葉態度の美しさは形ばかり真似ても、真似ないよりはよろしいが、それだけでは本当に言葉態度が良くなりません。心に気品を持ち、心に優しさを持ち、心に深切を本当に持たないで、言葉や形ばかりを真似たのでは、どうしても嘘らしい空々しさが見え透いて人が感心するものではありません。何よりも必要なのは本当に深切な心持です。「あの人によい思いをさせてあげたい、あの人をよい気持ちにさせてあげたい、どんな人にも不快な気持ちをさせたくない。」こういう気持ちを持つように日々心掛けておれば自然に言葉態度が優しく深切に、誰にとつても気持ちがよくなれるのです。

(光明思想社版『人生読本』267頁)

